巻頭言

日本人の宗教感覚を大切に

小島美子

日本人の多くの人は、あらゆるものに命、少くとも命のようなものがあると感じる宗教感覚をもっている。ただそれは余りにも自然なので、ほとんど意識されていない。

しかし、もしあなたがコップを落して割ってしまったら、ただ物がこわれたというだけでなく、コップに「ごめんなさい」といいたいような気持ちになりませんかと、いろいろな人に問いかけると、誰もが「そうね」と答える。

また職人さんたちと話していると、自分が扱っているものに対して、自分の子どもに対するような深い愛情をもっているのを感じる。あるテレビ番組で、織物を織っている女性は、自分の作品を何気なく「この子」といっていた。こういう気持で仕事をしているからこそ、日本の職人さんたちの技術・技能は世界一と評されるような力を発揮するのである。

針供養・人形供養などを始め、さまざまなものを使い捨てるときに供養する習慣があるのも、その例である。私の住む東京文京区の区報には、歯ブラシ供養をするという誘いの記事が載っていた。今年（平成二十七年）のことである。

生き物たちに対しては、その気持はもち論強い。とくに自分たちがその命をいただいて生きている動物たちに対して

は、古代の昔からその霊をていねいに慰める習慣があった。関東地方ではかつてよく食べていたイノシシの霊を慰めるための三匹シシ舞が、東北地方では鹿の霊のための鹿踊りが広がっていた。

そういう気持はもち論現在につづいている。東日本大震災で全壊したいくつもの魚市場で、再建されたとき、漁師さんたちが第一番にやったのが、魚魂祭であり、魚霊祭であった。

福島県の会津地方では、農業のために殺した害虫たちの霊を慰める虫供養をやっている。それもこれまでの供養塔はすぐにこわれるからと、十年程前にわざわざポプラ材で高さ一・五メートルの供養塔を新しく造ったのである。

東北北部では曲り家を建て、馬も人と同じ家の中で飼っていた例が珍しくなかった。中国地方ではかつて盛んに行なわれていた田植えの行事・囃し田では、人よりも田を鋤いたりならしたりする牛たちを、精一杯美しく飾りたてる。私は初めて見たとき、囃し田は牛が主役であると感じた程である。

日本の牧畜業では馬や牛などを自分の子どものように大切にする心があった。現在の多くの牛を飼う牧畜業になっても、テレビなどで見ると、牛を飼う人々の気持は変わっていないようだ。ＴＰＰ以後も恐らくはこの気持は失われないだろう。

そしてもち論人の命の大切さを知る日本人は、失われた人々の霊魂を慰めるために、出来得る限りのことをしようと努める。東日本大震災の大津波で多くの子どもたちの命が失われた宮城県の大川小学校では、校庭の側の土手の上に、かわいい地蔵が建てられ、二年近く経って私たちがお参りした日も、今日活けたばかりの花々が優しく囲み、いくつもの風車がカラカラと悲しい音をさせていた。

被災地の人々は涙を越えて、本来は祝いのための芸能も、なくなった人々の霊を慰めるためにどこでも演じていた。

福島県の原発の被災地である双葉町では、この夏（平成二十七年）櫓をたてて盆踊りをやった。この櫓の柱の元には、小さな氏神の祠が造られており、人々は先ずそこにお参りしてから踊りの輪に加わったという。日本の芸能には多かれ少なかれ、なくなった人々への鎮魂の気持があり、鎮魂のための芸能を捧げるという気持がある。考えてみれば、こう

した死者を弔う形は、すでに「魏志倭人伝」に見えていた。

こうした日本人のごく自然な心の動きは、宗教そのものではないと私は思う。もっと本源的で自由でひろやかな、宗教のベースにある感覚である。だからこそ日本人は多くの宗教に対しても排他的でなく寛容であり得る。私はこの宗教感覚に多くの人が気が付き、大切に持ち、次代の人々にごく自然に日常の生活の中で伝えてほしいと思う。

（国立歴史民俗博物館名誉教授）